



TITLE:

西晉の東宮と外戚楊氏

AUTHOR(S):

田中, 一輝

---

CITATION:

田中, 一輝. 西晉の東宮と外戚楊氏. 東洋史研究 2009, 68(3): 389-417

ISSUE DATE:

2009-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/167624>

RIGHT:

# 東洋史研究

第六十八卷 第三號 平成二十一年十二月發行

## 西晉の東宮と外戚楊氏

はじめに

第一章 武帝による東宮改革

第二章 賈充・楊琰の東宮入り

第三章 太康三年以降の東宮三傳

第四章 楊駿の奪權

第五章 惠帝即位後の東宮

おわりに

はじめに

西晉は八王の亂・永嘉の亂により弱體化し、短命のうちに滅亡した王朝であるが、その最初のきっかけとなったのは、楊駿ら外戚楊氏一派の擡頭とその誅滅である。楊駿は惠帝の即位の前後に政敵を排除し、專權體制を樹立したが、わずか一年後の永平元年（二九一年）三月に、惠帝の皇后 賈后 によるクーデターを受け、政權は崩壊、楊駿一派は誅殺される。

楊駿專權體制の出現とその崩壊は、廣義の八王の亂の開始を意味するものであり、西晉王朝の崩壊はこれに始まったと言つても過言ではない。

當時の貴族制の政治・社會にあつて、楊駿が擡頭し得た理由としては、そもそも楊駿が後漢代の「四世三公」の名家弘農楊氏の本流出身であつたことがまず挙げられるが、もう一つには、西晉における皇帝と貴族の姻戚關係の強化がある。西晉初代皇帝武帝は好色で有名な人物であるが、安田二郎氏は、武帝の後宮擴大は身分的内婚制の擴充を意味し、有力世族との個別的・直接的な關係の樹立を目的として行われたと指摘する。<sup>(2)</sup>後宮の女官の親族は、女官の後宮入りによつて官界での地位を向上させていったのであり、武帝は後宮の擴大と、それによる廣義の「外戚」の大量創出を、支配體制の強化に繋げたのである。武帝の「外戚」重視の姿勢が、後の楊駿の擡頭の根本的な要因であつたと言えよう。

しかしながら、楊駿擡頭の具體的な經緯については、なお不明な點が多い。西晉史研究の中心的史料である『晉書』のうち、武帝期の楊駿の動向に關する記述は非常に少なく、それが楊駿擡頭の經緯を不明瞭にさせている最大の原因である。よつてその説明にあたつては、楊駿ら外戚楊氏の事跡を把握するだけでなく、彼らが擡頭した政治的要因を明らかにする必要がある。

そこでまず外戚楊氏の列傳である『晉書』卷四〇の内容を確認すると、武帝期に「三楊」と呼ばれた外戚の楊駿・楊珧・楊濟の三兄弟の官歴のなかに、太子太傅・太子詹事等の東宮官屬が含まれていることに氣づく。さらに晉代の東宮の變遷を記した『晉書』卷二四 職官志 太子太傅・少傅條を一讀すると、西晉武帝期を通して東宮が度々の改組を被りながら擴大し、楊駿專權體制成立時である惠帝の即位直後には、東宮官屬の規模が最大に達していることが判明する。こうした東宮の變容・擴大は、當該期間の東宮の重要性を示しており、また西晉において重點化された東宮が、外戚楊氏の擡頭に何らかの作用を及ぼしていたことが考えられる。

西晉武帝期の東宮について、安田氏は咸寧元年（二七五年）の武帝の一時危篤の際、群臣の期待が當時の皇太子衷（後の

惠帝)ではなく、武帝の實弟 齊王攸へ集まったことを契機とし、皇太子の擁護のため、東宮を擴張したと主張する<sup>(3)</sup>。この他下倉涉氏は、同時期に太子詹事(後に領太子少傅)として東宮に入った楊珧について、楊珧を皇太子衷の後ろ楯になさんとする武帝の作爲が読み取れると言う<sup>(4)</sup>。このように、武帝期の東宮擴大の原因が武帝の皇太子擁護方針であること、またその際、皇太子擁護を直接的に行う人物として外戚の楊珧が選ばれたことが、先行研究により解明されているのであるが、楊珧ら外戚楊氏の擡頭と東宮の直接的な關連については、なお不明な點が多い。

そこで本稿では、武帝期に惠帝初期の東宮組織、東宮と外戚楊氏の關係を分析し、外戚楊氏擡頭の過程と惠帝初期の楊駿專權體制の基本構造、及び楊氏擡頭の原因を説明する。なお本稿が分析對象とする東宮官屬は、外戚楊氏と直接的に關係する幹部級官屬(太子太傅・少傅、太子詹事など)に限定し、太子中庶子・太子舍人などの下位の東宮官屬には及ばないことをあらかじめ斷っておく。

## 第一章 武帝による東宮改革

まずは、西晉泰始年間(二六五―二七四)の武帝による皇太子擁護の實態と、それに伴う東宮の變化を、多く安田氏の研究<sup>(5)</sup>に基づき検討する。

西晉初の立太子は、建國から約一年間が経過した泰始三年(二六七年)正月に行われた。西晉では立太子が比較的早い時期に行われているのであるが、この立太子については、安田氏が指摘するように、同時に發された詔の内容が立太子に對する武帝の消極性を示し、その儀式も極端に簡素化されていた<sup>(6)</sup>。ここからは、當時の武帝が立太子について特に積極的ではなかったことを朝廷の内外にうたえていたことが確認される<sup>(7)</sup>。

しかしそれはあくまで形式に過ぎず、いかに消極性をアピールしようとも、立太子自體はこの年に行われている。立太子の本來の目的について、安田氏は、武帝の弟、景帝司馬師の後嗣であり、朝臣の聲望を集めていた齊王攸が、親弟であ

れ一藩王・一臣下に過ぎないことを宣事するためであったと主張する<sup>(8)</sup>。皇太子が既に冊立された以上、文帝司馬昭の實子であり、伯父の司馬師を嗣いだ齊王攸でも、將來帝位に即くことは不可能となった。武帝は泰始三年の立太子により、齊王攸の將來における帝位繼承の可能性を奪ったのである。

齊王攸に限らず、當時の武帝は宗室の待遇に關しては苦慮していたらしい。周知の通り、西晉は宗室を厚遇した王朝であるが、安田氏は建國年の泰始元年（二六五年）に行われた宗室一齊封建について、司馬氏の長老格である司馬孚（宣帝司馬懿の弟）への破格の封邑（安平王・封邑四〇〇〇戸）を與える一方、宗室の疏族である司馬順に對しては廢黜を行ってゐることから、この封建には宗室の懷柔・統制という側面があったと指摘する<sup>(9)</sup>。この封建により王となった宗室は、安平王孚の他、司馬懿の甥、景帝司馬師・文帝司馬昭の諸弟など、武帝の上の世代の者ばかりであり、即位當初の武帝の宗室内部における立場は必ずしも高くなく、皇帝ではあつても、彼らへの配慮を缺かすことはできなかったのである。そのような状況の中で、敢えて立太子を舉行することは、將來の皇位繼承資格を、自己の直系子孫に限定することを宗室諸王に示すことにもなり、武帝の皇帝權確立の一環であつたとも言える。後に衷の「不慧」發覺により、一時は廢太子を考えながらも、武帝が基本的に皇太子尊重の姿勢を崩さなかつたのは、立太子時のこうした状況が原因であつたと思われる。そして武帝のこのような姿勢は、以後の東宮改革の根本要因となる。

立太子を濟ませた武帝は、續いて東宮官屬の設置・整備に取りかかる。

太子太傅・少傅、皆古の官なり。泰始三年（二六七年）、武帝始めて官<sup>(11)</sup>を建て、各おの一人を置き、尙お未だ詹事を置かず、官（宦）事に大小無く、皆二傅に由り、並びに功曹・主簿・五官有り。太傅は中二千石、少傅は二千石。其の訓導する者は、太傅前に在り、少傅後に在り。皇太子先に拜し、諸傅然る後に之に答う。武帝後に儲副の體の尊きを以て、遂に諸公に命じて之に居らしむ。本位の重きを以て、故に或いは行し或いは領す。時に侍中任愷、武帝の親敬する所にして、復た之を領せしむるは、蓋し一時の制なり。（『晉書』卷二四職官志 太子太傅・少傅）

東宮官屬の長官である太子太傅・少傅は、漢代以來、獨立した官職であり、その地位も特に高くなかったが、『晉書』職官志にある通り、西晉の太子太傅・少傅（東宮二傅）は後に皇太子の「體の尊き」を理由として、「諸公（三公・八公等の宰相職）」による兼任が原則となったとする。西晉初代の太子太傅李憺は、『晉書』卷四一 李憺傳に、

憺 二代の司隸と爲り、公事を以て免ぜらる。其の年、皇太子立ち、憺を以て太子太傅と爲す。

とあるように、「公事」を理由に司隸校尉を免職となった泰始三年の三月、新たに太子太傅に任命されたのであり、他に官職を兼任していたわけではなかった。彼の後任と思われる荀顗は、以前には太尉・侍中・都督城外牙門諸軍事であり、その後太子太傅を領したのであつて、職官志の言う「諸公」の太子太傅領任はこれが最初の例となる（ただし、泰始年間には後述の李胤のように、太子太傅・少傅を本官とする者がまれに存在した）。

この他に、西晉では太子太傅・少傅が他官を兼任する例もあつた。泰始（二六五―二七四）末年、太子少傅に就任した李胤は、『晉書』卷四四の本傳に、

……吏部尚書・僕射に遷り、尋いで太子少傅に轉ず。詔して胤の忠允高亮にして、匪躬の節有るを以て、司隸校尉を領せしむ。胤屢しば自ら表して譲り、忝なくも儲宮に傳たれば、宜しく監司の官を兼ねるべからずと。武帝二職並びに忠賢を須つを以て、故に毎に許さず。

とあるように、太子少傅を本官とし、その上で監察官である司隸校尉を領任したのである。李胤は「忝なくも儲宮に傳たれば、宜しく監司の官を兼ねるべからず」と、東宮官屬が監察官を領任する自身の人事に對して批判的であつたが、それにかかわらず武帝は李胤の司隸校尉領任を強行したのである。

以上のように、泰始年間の東宮官屬は、他官を兼任する例が多かつた。特にこのうちの「諸公」の東宮官屬領任は、東宮が政府中樞と結合する契機となる。しかしこの段階の東宮官屬からは外戚楊氏との直接的な關係をうかがうことはできない。外戚と東宮が本格的に結びつくのは、泰始末年に武帝の外戚重視方針が打ち出されて以降のことである。その詳細

は次章において論じたい。

## 第二章 賈充・楊琰の東宮入り

泰始年間末、武帝は皇太子擁護・崇重の方針に加え、外戚重用による體制強化を志すようになる。そもそも武帝は即位後、景帝司馬師の後羊徽瑜の一族である羊琇・羊祜等に中央軍を管理させるなど、外戚を重用する方針を即位當初よりとっていたが、泰始九年（二七三年）以降、武帝と直接的に姻戚関係にある朝臣（外戚）の重用という形に變化する。<sup>(16)</sup>

泰始九年、有名な「采女」——公卿以下の子女を後宮に入れる——が實施されたが、これについて安田氏は、將來皇太子衷が皇帝に即位する際、その「藩屏」たるべき衷の弟を數多く生むための施策であり、また後宮に子女を納めた官僚は、これにより地位を上昇させたと指摘する。<sup>(17)</sup> 泰始九年の「采女」は皇太子擁護策であると同時に、朝臣の「（廣義の）外戚」化とそれによる體制強化でもあった。

そして咸寧元年（二七五年）ごろ、武帝は外戚重視の方針をさらに強め、外戚楊氏擡頭の直接的なきっかけを作ることとなる。咸寧元年、武帝は洛陽で猛威をふるった疫病に感染し、翌二年（二七六年）正月には一時危篤状態に陥った。このとき群臣は、武帝死後の後繼者としての期待を皇太子衷ではなく、實弟の齊王攸（當時侍中・鎮軍大將軍・領太子太傅）に寄せた。<sup>(18)</sup> 安田氏はこの事件に對する武帝の反省を動機とし、咸寧二年の太子舍人から獨立する形で太子中舍人の設置や、同年八月の太尉賈充（惠帝の皇后 賈后的父。當時太尉・尚書令）の太子太保領任とそれによる東宮三傳制の確立、一〇月の楊芷（初代皇后 楊艶の從妹）の皇后冊立といった一連の施策を衷護持—攸黜損策と解釋する。<sup>(20)</sup> また下倉涉氏は、咸寧元年六月の太子詹事官設立と外戚楊琰（楊芷の叔父）の任命に着目し、一時的な太子詹事任命により楊琰を東宮に送り込み、咸寧三年（二七七年）ごろに領太子少傅に昇格させ、外戚を皇太子衷の後ろ盾に据えることで、皇太子擁護の強化をはか<sup>(21)</sup>ったと主張する。

安田・下倉兩氏の分析により、このときの武帝の政治的課題が外戚の重用と、齊王攸の名聲への對抗策としての皇太子擁護にあり、それが東宮に大きな変化をもたらしたことが明らかにされたのであるが、賈充・楊珧の東宮入りの實態やその効果についての具體的な分析は行われておらず、必ずしも明確ではない。本章ではその説明を中心に行うが、まずは楊珧の東宮入りの實態・効果の分析から始めたい。

前述の通り、下倉氏は咸寧元年に楊珧を太子詹事に任命し、二年後に太子詹事から太子少傅に昇任させることで、外戚による皇太子擁護を試みた主張するが、楊珧に關する人事の目的・効果は、果たしてそれだけにとどまるのか。ここで注目すべきは、武帝に敵視されながら、依然として太子太傅を領任していた齊王攸の存在である。<sup>(22)</sup>

齊王攸が武帝の不興を買いながらもなおその地位を守り続け、また武帝がこの時期に攸を排斥できなかった理由については後述するが、泰始三年の立太子以來、武帝の皇太子擁護の目的の一つに、齊王攸の聲望への對抗があったことは、安田氏の主張の通りであろう。ならば楊珧の東宮官屬任命の主目的は、東宮における齊王攸の抑壓にあったのではないか。『晉書』卷二四 職官志 太子太傅・少傅の條に、

咸寧元年、給事黃門侍郎楊珧を以て詹事と爲し、宮事を掌らしめ、二傳復た官屬を領せず。楊珧の衛將軍と爲り、少傅を領するに及び、詹事を省く。

とあるように、咸寧元年（二七五年）に楊珧が太子詹事に着任して以降、衛將軍となり太子少傅を領任（太子詹事を辭任）するまで、「二傳（太子太傅・少傅）」の下級官屬への監督權は停止されていたのであり、また咸寧元年當時、太子太傅は齊王攸が領任していたから、楊珧の太子詹事任命は、具體的に齊王攸の東宮における職權の侵奪を目的としていたと考えられる。齊王攸は太子太傅を領任したまま咸寧二年（二七六年）に賈充の後任として司空に任命されているが、當時の太尉・司徒・司空の三公には、議政權や百官の監督權等、所謂「宰相」としての權限は既<sup>(23)</sup>にない。また齊王攸は他に侍中を兼任していたが、當時の侍中は明確な職務を持たない官であったと思われる。<sup>(24)</sup>さらに『晉書』卷四四 李胤傳には、



咸寧の初、皇太子出でて東宮に居り、帝司隸の事任峻重にして、少傅に旦夕輔導の務有り、胤素より羸にして、宜しく久しく之を勞すべからずと以い、轉じて侍中を拜し、特進を加う。

とあるが、このうちの「皇太子出でて東宮に居り……少傅に旦夕輔導の務有り」は、皇太子が東宮に常時滞在することとなり、それに伴い太子少傅も東宮に常駐することが求められ、太子少傅職がにわかに劇職化したと解釋でき（そのため李胤は太子少傅と司隸校尉の兼務が不可能となり、ともに辭任することとなった）、同時期に太子太傅であった齊王攸も、東宮に常駐していたと考えられる。しかしそのときには、東宮は實質的に太子詹事楊珧の管理下にあったから、齊王攸は東宮の下級官屬への監督權も行使できず、東宮に封じ込められたことになる。<sup>(25)</sup>

ただしこのような解釋を行うにあたり問題となるのが、楊珧の太子少傅領任（太子詹事離任）時期である。「晉書」にはその正確な年代が記されていないが、咸寧三年（二七七年）に楊珧が衛將軍であったとする記述は見られるのであり、ゆえに下倉氏も、楊珧の太子少傅領任を咸寧三年のこととし、楊珧の太子詹事任命を「一時的」「楊珧を東宮府へ送り込むための便法」と解釋せざるを得なかったであろう。

しかし、實際の楊珧の太子少傅領任（太子詹事辭任）は、咸寧三年よりも後のことである。それを示すのが、一九三一年洛陽にて出土した「大晉龍興皇帝三臨辟雍皇太子又再莅之盛德隆熙之頌」の題額をもつ石碑（以下、『晉辟雍碑』）の碑陽の記述である。

〔咸寧〕四年二月、大射禮を辟雍に行う。……大保侍中太尉魯公充、大傅侍中司空齊王攸、詹事給事中光祿大夫關内侯珧、及び百辟卿士と、共に辟雍に升り、親しく禮樂に臨み、儲尊の貴を降し、齒讓の制を敦くす。<sup>(27)</sup>

『晉辟雍碑』の記述によれば、咸寧四年の楊珧の官名は、依然として「（太子）詹事」であったのであり、楊珧の太子少傅領任は、咸寧四年（二七八年）以降のこととせねばならない。したがって、楊珧は咸寧元年以降の數年間は太子詹事であったことになり、咸寧三年に楊珧が衛將軍（領太子少傅）であったとする『晉書』の記述はこれにより否定される。

また余嘉錫氏は、『晉辟雍碑』とその他の史料の分析により、楊珧の太子少傅領任（太子詹事辭任）年代を太康三年（二八二年）とした。<sup>(28)</sup> 楊珧の太子詹事在任時の役割を踏まえるならば、楊珧が太子詹事であった期間を、（攸の出鎮（後述）が決定する）太康三年までであったとする余氏の指摘は妥當であろう。楊珧を太子詹事に任命したこの人事は、下倉氏の言うように單に楊珧を東宮に送り込むための便法であったのではなく、事實上の齊王攸の職權停止を目的としたものであったのである。<sup>(29)</sup> そもそも齊王攸が東宮官屬となったことについて、安田氏は齊王攸が保傅以外の何者でもないことを標示する措置であったと主張するが、楊珧の太子詹事就任は、それをさらに徹底させたものであった。楊珧自身、齊王攸の排斥には積極的であつたらしく、咸寧三年には攸の封國（齊國）出鎮という形で排斥を企てている。<sup>(31)</sup>

楊珧の太子詹事任命が武帝による齊王攸抑壓の一環であつたことは判明したが、一方の咸寧二年の賈充の太子太保領任はどのように解釋すべきであろうか。賈充は泰始年間（二六五―二七四）に皇太子衷（惠帝）に嫁ぎ、<sup>(32)</sup> 後にその皇后となる賈南風の父であり、咸寧二年以前は司空・尚書令の地位にあつた。また當時の賈充の朝廷における立場は、『晉書』卷四五 任愷傳に、

充既に帝の遇する所と爲り、名勢を専らにせんと欲し、而して庾純・張華・溫顥・向秀・和嶠の徒は皆愷と善く、楊珧・王恂・華廙等は充の親敬する所にして、是に于いて朋黨紛然たり。

とあるように、西晉朝廷を二分する派閥の領袖であり、楊珧は賈充派の一員であつた。

賈充を領袖とする派閥に楊珧が屬していたことを踏まえるならば、楊珧と賈充が東宮内において齊王攸の抑壓に荷擔したことがまずは考えられるのであるが、賈充は皇太子衷の他に、齊王攸にも娘を嫁がせているのであつて、<sup>(33)</sup> 皇太子衷を擁護する一方で齊王攸への抑壓に荷擔したと判斷するのは困難である。またこの時期に齊王攸が武帝からの抑壓を受けながらも、失脚を免れたことについて、安田氏は、齊王攸の失脚が武帝の專制化につながることを恐れた賈充の存在により、武帝は齊王攸に對してはその力を行使しえなかつたと主張する。<sup>(34)</sup> するとこの時期の武帝と齊王攸の對立状況にあつて、賈

充の立場は政治的利害という意味では比較的中立に近く、賈充の東宮入りが、齊王攸抑壓を目的としたものではなかったことになる。

そもそも太子太保領任は、賈充の意志に沿った人事であつたのだろうか。賈充は武帝危篤の際、齊王攸を推戴する朝臣の動きを黙認したことから武帝の懷疑を招き、それまで保持していた都督城外諸軍事を剝奪されて<sup>(35)</sup>いるが、賈充の太子太保領任はこの直後のことであるため、東宮入り自體、賈充への懲罰的措施という側面を持っていた可能性もある。また咸寧二年（二七六年）の賈充の官職について、『晉書』卷四〇 賈充傳には、

尋いで太尉・行太子太保・錄尚書事に轉ず。

とあり、賈充は咸寧二年の太尉昇任・太子太保領任と同時に、錄尚書事となっており、それに伴い、尚書令の地位を手放している。錄尚書事とは後漢より始まる尚書の職號であり、曹魏時代には陳群・曹爽・司馬懿・司馬師・司馬昭など、當時の重臣がこれに就いた。その職權については、『宋書』卷三九 百官志上 尚書條に「錄尚書の職は總べざる無し」とあるように、曹魏では政府中樞であつた尚書を總領する官として強力な權限を有していた。しかし西晉の錄尚書事について祝總斌氏は、また錄尚書事を得た大臣が朝政を壟斷するといった例は見られないことなどを根據として、その權限はさほど大きくなかつたと主張する<sup>(37)</sup>。

武帝期には、建國年の泰始元年（二六五年）に驃騎將軍の王沈が「佐命の勳」を理由に錄尚書事となつたが、翌二年（二六六年）に沈が死去して以降の一〇年間は錄尚書事はなかつた。錄尚書事は曹魏時代、司馬氏專權の中核的官職であり、專制化を目指していた武帝にとって、錄尚書事存在は、自らの權勢の伸張の阻害要因となるため、王沈死後の錄尚書事配置を見合せていたのである。咸寧二年の賈充への錄尚書事任命は、王沈の死後實に一〇年ぶりのことであるが、祝氏の言うとおり、西晉の錄尚書事が巨大な權限を有していたとは考えにくく、また武帝がことさらこの時期に錄尚書事の復活や、賈充の權限強化の必要を感じたとも思えない。咸寧二年前後の賈充をめぐる狀況變化を踏まえると、尚書令↓錄

尙書事の人事は、賈充の政務の據點が、尙書省から東宮に移行したことを意味するものであったと考えられる。

賈充の録尙書事任命は、充の權威強化を目的としたものではなく、またこのときの録尙書事にそれほど強力な権限はなかったと判断せざるを得ないのであるが、しかし尙書令を辭任した後、録尙書事となったことで、賈充は咸寧二年以後も尙書省との關係を維持することにはなった。賈充の録尙書事任命は、その権限の削減を意味するものではあったが、當時の武帝が尙書省における賈充の権限を完全に剝奪することには至らなかったことも同時に示している。

しかも、かえって賈充はこの人事により、東宮内で行われている齊王攸と楊珧の對立の調停を行い、齊王攸の排斥を防止することができた。さきに武帝の專制化を恐れた賈充の存在のために、武帝はその力を齊王攸に對して行使できなかったとする安田氏の説を紹介したが、賈充はその現場である東宮に乗り込んだことにより、自派の構成員である楊珧の動きを直接的に牽制することが可能となったのである。

本章では楊珧・賈充それぞれの東宮入りについて考察した。楊珧の太子詹事就任は外戚楊氏と東宮の結合の端緒であり、また賈充が太子太保を領任すると同時に録尙書事となったことは、東宮幹部の尙書關連職兼任の端緒となる。こうした東宮の變化は、以後の西晉政治に大きな影響を與えることとなる。

### 第三章 太康三年以降の東宮三傳

太康三年（二八二年）十一月、齊王攸に大司馬・都督青州諸軍事任命の詔が下り、翌四年（二八三年）、齊王攸は青州に出鎮（就國）し、遂上で死去する。周知の通り、これらは齊王攸の中央からの排斥を意味する。出鎮とは具體的には州都督任命を指すが、咸寧三年（二七七年）、宗室都督の封國と出鎮州との一致・近接化がはかられた。<sup>39</sup>攸の齊王國は青州にあるので、咸寧三年の規定が太康三年によく齊王攸に適用されたこととなる。

咸寧元年（二七五年）に武帝は齊王攸の太子太傅としての職權を封じるために楊珧を太子詹事に任命し、またその楊珧

は咸寧三年に齊王攸の排斥を武帝に提案するなど、武帝・楊琰による齊王攸への抑壓や排斥のための活動が恒常的に行われていたのであるが、にもかかわらず齊王攸の出鎮（事實上の失脚）が太康三年まで引き延ばされたのは、前述の通り、賈充が武帝の齊王攸排斥を抑制していたためである。しかし太康三年四月の賈充の死により、齊王攸排斥の障害がなくなった武帝は、同年一二月に齊王攸出鎮の詔を發することになる。齊王攸は詔を受けた太康三年一二月、太子太傅も解任されることとなった。

これに先立ち、朝臣から齊王攸出鎮への反對意見が續出したが、そのうちの王渾の上奏の中に、注目すべき一文がある。會たま朝臣立ちて齊王攸の當に藩に之くべきかを議し、渾上書して諫めて曰く……愚以爲えらく太子太保缺し、宜しく攸を留めて之に居り、太尉汝南王亮・衛將軍楊琰と共に保傅と爲し、朝事を幹理せしむるべし。三人位を齊しくすれば、相い正を持するに足り、進みては廣義を輔納するの益有り、退きては偏重して相い傾くるの勢無し。陛下をして親親の恩を篤くする有らしめ、攸をして仁覆の恵を蒙らしめん。（『晉書』卷四二 王渾傳）

この上奏は、賈充の死による太子太保の缺員が記されていること、また「會たま朝臣立ちて齊王攸の當に藩に之くべきかを議し、渾上書して諫めて曰く……」とあるように、上奏がまだ攸の出鎮が決定していない段階のものであったことなどから、賈充が死去した三月以降、攸出鎮の詔が出された一二月までに行われたと考えられる。王渾は、賈充の後任の太子太保に齊王攸を推薦し、それによって齊王攸の出鎮を防止しようとしたのであるが、他の二傳について、王渾は宗室の汝南王亮（武帝の叔父）と楊琰を推薦している。結局齊王攸の出鎮は強行されたのであって、王渾の上奏はしりぞけられたことになるのだが、齊王攸出鎮後の太子太傅については、『晉書』卷三 武帝紀 太康三年一二月の條に、

十二月甲申、司空齊王攸を以て大司馬・督青州諸軍事と爲し、鎮東大將軍琅邪王伉を撫軍大將軍と爲し、汝南王亮を大尉と爲し、光祿大夫山濤を司徒と爲し、尚書令衛瓘を司空と爲す。

とあり、また『晉書』卷五九 汝南王亮傳に、

太尉・録尚書事・領太子太傅に遷り、侍中は故の如し。

とあることから、汝南王亮が領任したことが判明し、また太子少傅については、前章にて太康三年に楊珧が領任したとする余嘉錫氏の説を紹介したが、既に楊珧が太子少傅を領任していたのであれば、王渾があらためて楊珧を東宮の「保傅」に推薦する必要はないため、やはり太康三年に楊珧が領任したと見られる<sup>(40)</sup>。太子太傅・少傅のそれぞれを汝南王亮・楊珧が領任したことは、奇しくも王渾の上奏の内容と一致しており、武帝が太子太傅・少傅の人選に限り、王渾の上奏を参考にした可能性もある。賈充の後任の太子太保は、外戚であり楊珧の實兄である車騎將軍楊駿が領任した（行太子太保。つまり太康三年末の東宮三傳は、太子太傅汝南王亮・太子太保楊駿・太子少傅楊珧であったのであり、三傳のうち二傳を外戚楊氏が占めていたことになる。このとき賈充の後任の太子太保に楊駿が選ばれた具體的な経緯については、史料上にそれを明確に示す記述がないため、不明とせざるを得ない。

しかし三傳のうち二傳を楊駿・楊珧の兄弟が占めるといふこの状況は長くは續かなかつた。この後間もなくして、司空・侍中・尚書令の衛瓘が、楊珧に代わつて太子少傅を領任し、東宮幹部は太子太傅汝南王亮・太子太保楊駿・太子少傅衛瓘の三者體制に移行する（この體制は太康一〇年（二八九年）まで續くこととなる<sup>(41)</sup>）。ここで楊珧は東宮から完全に離脱したのであるが、楊駿が太子太保を領したことに、東宮と外戚楊氏の關係は維持されることとなつた。

以上、太康三―一〇年の東宮三傳の推移を確認したが、この時期の東宮三傳（汝南王亮・楊駿・楊珧・衛瓘）は、全員が武帝と姻戚關係にあつた。外戚である楊駿・楊珧の他、太子太傅汝南王亮は、前述の通り武帝の叔父であり、咸寧三年には「宗師」の號を與えられ、宗室の長老格として武帝の信賴を得ていた人物である。また衛瓘は、「爲政清簡」をもつて朝野の聲望を集めていた人物で、第四子の衛宣は武帝の娘である繁昌公主の婿であつた<sup>(42)</sup>。おそらくは武帝と姻戚關係にある大臣による皇太子の擁護・訓導が、ここで本格的に志向されたのであろう。

さらに楊珧を除く東宮三傳（汝南王亮・楊駿・衛瓘）には、尚書省關連職を兼任しているという共通點がある。汝南王亮

は太康三年の太子太傅領任とともに録尚書事となっており（前掲『晉書』汝南王亮傳）、衛瓘は咸寧四年に尚書令に就任し、太康年間（二八〇―二八九）に太子少傅を領任して以降も尚書令の地位は手放さなかった。<sup>(43)</sup>また楊駿も、正確な年代は不明であるが、行太子太保時代に録尚書事に任命されている。<sup>(44)</sup>このように、當時（衛瓘の太子少傅領任以後）の東宮三傳の全員が、何らかの形で尚書省の運営に携わっていたのである。もともとこのうちの衛瓘の場合、劇職であった尚書令を本官としており、太子少傅としての職務を十分に果たし得たかについては疑問である。衛瓘は太康八年（二八七年）ごろに尚書令を辭任しているが、これは太子少傅と尚書令の兼任に無理が生じたことが原因であったと思われる。そのような無理を押し通してまで、敢えて衛瓘に太子少傅と尚書令を兼任させた點に、東宮三傳に尚書省を管理させようとする武帝の意志が看取されるのである。

前章で述べたように、賈充は咸寧二年の太子太保領任の際、同時に録尚書事となり、太康三年までのおよそ六年間、その地位を保っていた。當初は懲罰という性格を有していた賈充の太子太保領任であるが、この間に東宮幹部の尚書省管理はこの間に定着・慣例化したと思われる。おそらくはこうした現状を踏まえたのであろう、前掲の太康三年の王渾の上奏には、「愚以爲えらく太子太保缺し、宜しく攸を留めて之に居り、太尉汝南王亮・衛將軍楊琰と共に保傅と爲し、朝事を幹理せしむるべし」とあり、王渾は東宮三傳に「朝事を幹理」させることを提案している。「朝事を幹理」させるとは、具體的には賈充のように東宮幹部に尚書省關連の官職を兼任させることを示すと思われる。前述の通り、太康三年以後の東宮三傳の人選については王渾の上奏が参照されたと考えられ、東宮三傳に尚書省關連職を兼任させたことに關しても、原案はこの王渾の上奏であった可能性がある。

さらに王渾の上奏には、「三人位を齊しくすれば、相い正を持するに足り、進みては廣義を輔納するの益有り、退きては偏重して相い傾くるの勢無し。」とあり、同格の三傳に「朝事を幹理」させることの利點として、一傳への權力の偏りの防止を擧げている。具體的には、三傳に尚書省の運営を擔當させながらも、三傳を並立させることで、うち一人の獨裁

化を抑制することができる、という意味になろう。既に咸寧二年（二七六年）より、齊王攸とその排斥をはかる楊珧、楊琰の動きを抑制する賈充というように、東宮幹部の間では相互牽制が行われていた。衛瓘が尙書令を辭任し、尙書省との關係を絶つた後は、汝南王亮と楊駿の二傳の間でこの効果がはたらく、一方への權力の集中を防いだと思われる。事實、武帝はその晩年まで、あくまで汝南王亮と楊駿の二者による輔政を望んでいたのである。<sup>(46)</sup>

要するに、太康三年以後、東宮三傳に錄尙書事・尙書令を兼任させる一方、三傳を並立させることによりその獨裁化を防ぐという支配體制が構築され、楊駿はその最高幹部の一人となったのである。ただし三傳の相互牽制効果がはたらいっていたとは言え、最終的に三傳のバランスを維持するのは武帝個人の力量であつたのであり、武帝が死去すれば、三傳間のバランスが崩壊し、そのうちの一人が獨裁化する危険性を有していた。そしてそれは武帝が危篤状態に陥る太康一〇年（二八九年）に現實のものとなる。

#### 第四章 楊駿の奪權

太康一〇年（二八九年）、武帝は危篤状態に陥り、翌太熙元年（二九〇年）四月に死去する。この間に、專權體制構築に向け、楊駿の動きが活発化する。

まず太康一〇年十一月、宗室の一齊封建・出鎮が行われる。

甲申、汝南王亮を以て大司馬・大都督と爲し、黃鉞を假す。南陽王東を改封して秦王と爲し、始平王瑋を楚王と爲し、濮陽王允を淮南王と爲し、並びに節を假して國に之き、各おの方州の軍事を統べしむ。皇子父を立てて長沙王と爲し、穎を成都王と爲し、晏を吳王と爲し、熾を豫章王と爲し、演を代王と爲し、皇孫適を廣陵王と爲す。濮陽王の子迪を立てて漢王と爲し、始平王の子儀を毘陵王と爲し、汝南王の次子業を西陽公と爲す。扶風王暢を徙して順陽王と爲し、暢の弟歆を新野公と爲し、琅邪王覲の弟澹を東武公と爲し、繇を東安公と爲し、渥を廣陵公と爲し、卷を東



莞公と爲す。〔晉書〕卷三 武帝紀)

この一齊封建は、一般的に武帝が自らの死後の體制安定化のために行った措置と解釋されているが、このうちの汝南王亮の出鎮に關しては事情が異なる。

武帝の疾に寝ぬるに及び、楊駿の排する所と爲り、乃ち亮を以て侍中・大司馬・假黃鉞・大都督・督豫州諸軍事と爲し、許昌に出鎮せしめ、軒懸の樂・六佾の舞を加う。子の羨を封じて西陽公と爲す。未だ發せずして、帝大いに漸み、詔して亮を留めて委ぬるに後事を以てす。楊駿之を聞き、中書監華廙に従い詔を索して視、遂に還さず。〔晉書〕卷五九 汝南王亮傳)

つまり汝南王亮の出鎮は、楊駿による排斥の結果であつた。<sup>(48)</sup> 實際に汝南王亮が許昌に赴任したのは、武帝が死去する太熙元年(二九〇年)四月以降であるが、汝南王亮が領任していた太子太傅や錄尚書事は、出鎮が決定した太康一〇年一月に剝奪されたと考えてよい。また楊駿は太熙元年(二九〇年)正月、太子少傅であつた衛瓘の失脚をも畫策する。

宣(衛瓘の第四子)公主を尙るも、數しば酒色の過有り。楊駿素より瓘と平らかならず、駿復た自ら權重を専らにせんと欲し、宣若し離婚せば、瓘必ず位を遜れば、是に於いて遂に黃門等と之を毀し、帝に諷して宣の公主を奪せしむ。瓘慚懼し、老にして位を遜るを告ぐ。乃ち詔を下して曰く、「司空瓘の年未だ致仕ならず、而れども遜讓すること歴年、神志の未だ衰えざるに及び、以て本情を果たさんと欲し、至眞の風、實に吾が心に感ず。今其の執る所を聽し、位を太保に進め、公を以て第に就かしめん。親兵百人を給し、長史・司馬・從事中郎の掾屬を置き、及び大車・官騎・麾蓋・鼓吹の諸威儀は、一に舊典の如し……。」と。〔晉書〕卷三六 衛瓘傳)

楊駿は衛瓘の子の宣の「酒色の過」につけ込み、衛瓘を引退に追い込むことをはかった。その後の詔には、衛瓘の太保昇進・親兵一〇〇人以下の官屬の配置など、かえつて衛瓘を優遇する内容が盛り込まれており、また太子少傅職については言及されていないが、「公を以て第に就かしめん(以公就第)」とあり、衛瓘が就第(私邸にもどること)を命ぜられたこ

とから、少なくとも東宮にはいなかったことが確認され、楊駿の謀略は成功したと見てよからう。<sup>(49)</sup>ひとまず楊駿は、汝南王亮・衛瓘を東宮から追放し、東宮を獨占することに成功したのである。

ところがこの二か月後の太熙元年（二九〇年）三月に、右光祿大夫の石鑑が司空・領太子太傅に任命されている。<sup>(50)</sup>石鑑の太子太傅領任は汝南王亮の後任としての人事であろうが、石鑑は特に楊駿派であつたとは思われず、したがって石鑑の太子太傅領任が楊駿の意向を反映した人事であつたとは考えにくい。石鑑の太子太傅領任は、楊駿の東宮獨占・政敵排斥に對する、武帝の牽制であつたのではないか。<sup>(51)</sup>

そのような事情もあり、楊駿の活動は一時的に鈍化するのであるが、結果として楊駿は實權掌握に成功する。

信宿の間、上の疾遂に篤く、后（楊皇后）乃ち帝に駿を以て輔政せしめんことを奏し、帝之に領く。便ち中書監華廙・令何劭を召し、宣帝の旨を口にし遺詔を作らしめ、曰く、「昔伊・望佐を作し、勳・不朽に垂る。周・霍命を拜し、名・往代に冠たり。侍中・車騎將軍・行太子太保・領前將軍楊駿、……宜しく位を上臺に正し、跡を阿衡に擬すべし。其れ駿を以て太尉・太子太傅・假節・都督中外諸軍事と爲し、侍中・錄尚書・領前將軍は故の如し。參軍六人・歩兵三千人・騎千人を置き、移りて前の衛將軍琇の故府に止まれ。若し殿中に止宿すれば宜しく翼衛有るべし。其れ左右衛三部司馬各おの二十人・殿中司馬十人を差して駿に給し、兵仗を持して出入するを得しめん。」と。（『晉書』卷四〇 楊駿傳）

再び病狀が悪化した武帝に、楊皇后が父親の楊駿に「輔政」させることを要求し、さらに中書監の華廙・中書令の何劭を抱き込み、楊駿の太尉・太子太傅（領太子太傅？）・都督中外諸軍事任命などの内容を盛り込んだ「遺詔」を作成させた。この前月に司空の石鑑が領任した太子太傅職は、「遺詔」により楊駿の手に移り、石鑑は東宮から追放されたのである。

以上は太康一〇年～太熙元年の楊駿の政敵排除・專權體制構築のあらましであるが、楊駿の一連の政敵排除が、東宮獨占を目的としたものであつたことが理解されよう。東宮の同僚であつた汝南王亮・衛瓘を排除し、また武帝が楊駿への牽

制として東宮に送り込んだ領太子太傅石鑑も、一か月後の「遺詔」發令という強行策をもって東宮から追放した。これにより、楊駿は實質的に單獨の東宮幹部（太子太傅）・錄尚書事となり、さらに「遺詔」にある都督中外諸軍事なども加えられた。楊駿は武帝の死に先立ち東宮を押さえておくことで、武帝死後に皇帝となる皇太子衷の身邊警護の權利を獨占し、その即位後の專權體制構築の布石としたのであろう。

## 第五章 惠帝即位後の東宮

「遺詔」が發された二日後、武帝は死去し、皇太子衷が即位する（惠帝）。そして惠帝の即位とはほぼ同時に、東宮は急激に擴大する。

惠帝元康元年、復た詹事を置き、二傳 茱田六頃、田騶六人を給され、立夏の後に田に及ばざる者は、奉一年を食む。丞一人を置き、秩千石。主簿・五官掾・功曹史・主記門下史・錄事・戶曹法曹倉曹賊曹功曹書佐・門下亭長・門下書佐・省事各一人、赤耳安車一乘を給す。愍懷（愍懷太子）の官を建つるに及び、乃ち六傳、三太・三少を置き、景帝の諱の師たるを以て、故に太師を以て太保と爲す。<sup>(52)</sup> 尚書の事を通省し、詹事の文書は六傳を關由す。（『晉書』卷二四 職官志 太子太傅・少傅）

元康元年、（愍懷太子）出でて東宮に就く。……是に於いて太保衛瓘の息庭・司空泰の息略・太子太傅楊濟の息晔・太子少師（少帥）裴楷の息憲・太子少傅張華の息禕・尚書令華廙の息恒をして太子と游處し、以て相い輔導せしむ。（『晉書』卷五三 愍懷太子傳）

引用した『晉書』職官志 太子太傅・少傅條冒頭に「惠帝元康元年（二九一年）」とあるが、この文の直後に「愍懷の官を建つるに及び」と、惠帝永熙元年（二九〇年）八月の愍懷太子（遙）の東宮入りの記述が續くので、文中の「元康元年」は單に惠帝即位の初年（永熙元年）という意味であろう。惠帝即位直後に太子詹事が復活し、<sup>(53)</sup> 二傳・詹事のそれぞれに屬

官である丞が置かれ<sup>(54)</sup>（主簿以下の官属の配置については、東宮に限らず、同時期に三公・特進・光祿大夫などにも行われているので、東宮の組織擴大や機能強化を目的としたものではなく、惠帝即位に伴う恩賜的措置であったと思われる）、同年八月の愍懷太子冊立の際には、東宮六傅制が施行された。さらに愍懷太子の訓導のため、高官子弟から選抜した太子賓友が設置された（この中には、楊駿の政敵であった衛瓘の子衛庭も含まれていた）。こうした擴大の目的について、詳しいことはわからないが、『北堂書鈔』卷六五 太子太師條原注に引く王隱『晉書』に、

初め、楊駿 世祖の毎に意を廣陵王適に注ぎ、而して賈后に子無きを以て、終に適を立てて皇太子と爲す。

とあるように、そもそも愍懷太子の冊立が楊駿の意志によるものであり、また惠帝の即位からわずか四か月後に冊立された（これについては、賈后に子が生まれ、それが立太子されれば實權が賈后一派に移行するおそれがあったため、その防止が主目的であったと思われる）ことから、楊駿が皇太子の冊立とその擁護に積極的であったことが確認され、當時の東宮の擴大は、楊駿による皇太子擁護の一環であったと推察される。

このとき復活した太子詹事について、その職掌が咸寧年間の楊琰就任時と変わらないのであれば、このときも太子太傅・少傅に代わって「宮事を掌」ったことになる。『唐六典』卷二六 太子詹事府條原注に引く『晉令』に、

詹事、品第三、銀章・青綬、絳朝服、兩梁冠。局事は尙書令に擬し、位は領・護將軍に視す。三令・四率・中庶子・庶子・洗馬・舍人に長たり。

とあるが、このうちの「四率」とは東宮の警備兵である衛率のことであり、これが前後左右の「四率」に整備されたのは元康年間（二九一―二九九）のことであるので、<sup>(56)</sup>『晉令』の内容は、元康年間以後の太子詹事の規定であったことになる。<sup>(57)</sup>基本的に西晉における太子詹事は、太子中庶子・太子舍人といった東宮官属の直接の上官であったことがこれで判明する（ただし太子詹事復活の理由は不明）。前掲『晉書』職官志には「詹事の文書は六傅を關由す」とあり、これは東宮六傅制の施行後、太子詹事―皇帝間の（東宮運営に關する）文書の通達には、東宮六傅を経由していたことを示し、通達に際し六傅

による文書の取捨選擇が行われていたことをうかがわせる。東宮の事務に關しても、太子詹事に對する六傳の干涉があつたかもしれない。そして新設の東宮六傳については『晉書』卷五三 愍懷太子傳に、

惠帝即位するや、立ちて皇太子と爲る。盛んに德望を選び以て師傳と爲し、何劭を以て太師（太帥）と爲し、王戎を太傳と爲し、楊濟を太保と爲し、<sup>(58)</sup>裴楷を少師（少帥）と爲し、張華を少傳と爲し、和嶠を少保と爲す。

とあるように、「德望」を選擇條件として、太子太師には何劭が、太子太保には王戎、太子太保に楊濟（楊駿・楊珧の弟）、太子少師に裴楷、太子少傳に張華、太子少保に和嶠が、それぞれ選ばれ、就任した（この六人は東宮職を本官としていた）。

またこのとき太子太傳に王戎が就任したことにより、楊駿は太子太傳を辭任し、正式に東宮を離れることとなった。楊駿は惠帝即位後に太傳・大都督となっている。<sup>(59)</sup>

このうちの二傳に代わり東宮を管理する太子詹事の復活や、楊駿自身の東宮離脱などの諸點を一見すると、あたかも楊駿が東宮を放棄したかのような印象を受ける。しかし、『晉書』卷四〇 楊駿傳に、楊駿專權體制が惠帝の皇后 賈后のクーデターにより崩壞する直前のこととして、

時に駿 曹爽の故府に居り、武庫の南に在り、内に變有るを聞き、衆官を召して之を議せしむ。太傅主簿の朱振 駿に説きて曰く、「今内に變有り、其の趣知るべし、必ずや是れ閹豎の賈后の爲に謀を設くるに、公に利あらず。宜しく雲龍門を燒き以て威を示し、事を造す者の首を索め、萬春門を開き、東宮及び外營の兵を引き、公自ら皇太子を擁翼し、宮に入りて姦人を取るべし。殿内震懼し、必ず斬りて之を送り、以て難より免るるべし。」と。

と、太傅主簿の朱振がクーデター部隊に對抗するため、「東宮及び外營の兵」を率い、楊駿自ら皇太子を擁し、宮中に進攻をかけることを提案したことが記されているが、これにより楊駿が體制崩壞時まで皇太子を擁し、東宮の兵（衛率配下の部隊）を動員し得る手段を有していたことが判明する。以上から、楊駿と東宮の關係はこの時點においても繼續していたと判斷できる。

また武帝期に見られた東宮と尚書省の関係については、前掲『晉書』職官志の「乃ち六傳、三太・三少を置き、景帝の諱の師たるを以て、故に太師を以て太保と爲す。尚書の事を通省し（通省尚書事）、詹事の文書は六傳を關由す」という記述に注目される。東宮六傳には太子詹事の扱う文書の經由の他に、「尚書の事を通省（通省尚書事）」する権限が認められていたのであるが、この「通省尚書事」は、録尚書事とはほぼ同義の語と思われる、咸寧二年の太子太保・録尚書事賈充以來の、東宮幹部の尚書關連職の兼任が、ここでも繼續していたことが確認される。

楊駿―東宮、東宮―尚書省のそれぞれの関係に根本的な變化がなかったとすれば、この時期においても、この三者の結合は維持されていたと考えられる。ただし楊駿自身は東宮を離れているため、楊駿の尚書省管理は、楊駿が東宮六傳に自らの腹心を送り込み、「通省尚書事」によつて尚書省を間接的に支配するという形態をとっていたことが、まずは豫想される。しかしそのように判断するには、楊駿と東宮六傳の関係について、若干の問題がある。

まず太子少帥の裴楷と楊駿の関係について、『晉書』卷三五の裴楷傳には、

楷の子瓚は楊駿の女を娶り、然れども楷素より駿を輕んじ、之と平らかならず。

とあり、楊駿と裴楷は姻戚關係であつたが、裴楷と楊駿の仲は決して良好ではなかつた。また『晉書』卷三六張華傳には、

惠帝即位するや、華（張華）を以て太子少傳と爲すも、王戎・裴楷・和嶠と俱に德望を以て楊駿の忌む所と爲り、皆朝政に預からず。

とあり、太子太傳王戎・太子少帥裴楷・太子少傳張華・太子少保和嶠は、楊駿に忌避されたため、東宮六傳でありながらも、朝政に參與することができなかったのである。當然、この四名には「通省尚書事」の権限が與えられなかつたことになる。楊駿が彼ら四人と不仲でありながら、東宮六傳の地位に据えたのは、單に愍懷太子崇重のため、彼らの「德望」を必要としたからに過ぎない。

このように、東宮六傳に「通省尙書事」を認めたとする『晉書』職官志の記述は必ずしも正確ではなく、王戎・裴楷・張華・和嶠の四名には「通省尙書事」権は與えられなかったと見るべきである。では『晉書』張華傳に名の擧がらなかった、太子太師何劭・太子太保楊濟の二名についてはどうかであったか。

まず太子太師の何劭については、『晉書』卷三三の本傳に、

惠帝即位するや、初めて東宮を建て、太子の年幼きも、萬機に親しめんと欲し、故に盛んに六傳を選び、劭を以て太子太師（太師）と爲し、尙書の事を通省せしむ（通省尙書事）<sup>(60)</sup>。

とあるように、「通省尙書事」が認められていた。一方太子太保楊濟の「通省尙書事」については史料に記述がなく、逆に『晉書』卷四〇の本傳には兄の楊駿との不仲を伝える記述があるため、楊濟も「通省尙書事」権を有していなかったと思われる。結局、當時の東宮六傳のうち、確實に「通省尙書事」権を有していたと判断できるのは、太子太師何劭ただ一人となる。すると楊駿は、何劭を太子太師に任命し、「通省尙書事」権を與えることで、楊駿―東宮（何劭）―尙書省の指令系統を形成したことになる。

何劭一人に「通省尙書事」が認められた背景には太熙元年（二九〇年）の「遺詔」があつたのではないか。何劭は太子太師就任以前は中書令であり、太熙元年の「遺詔」作成の當事者であつた。その功績を楊駿に評價されたため、何劭は東宮六傳の首席である太子太師に任命され、さらに「通省尙書事」権を與えられたのであろう。何劭と同じく「遺詔」作成にあつてゐた中書監華廙は、『晉書』卷四四の本傳に、

惠帝即位するや、侍中・光祿大夫・尙書令を加えられ、爵を進めて公と爲る。

とあるように、惠帝即位後に尙書令となつてゐる。おそらく華廙も何劭と同様の理由から尙書令に任命されたのであろう。つまり、「遺詔」作成に關與した中書監華廙と中書令何劭は、楊駿の腹心として、それぞれ尙書令・太子太師（通省尙書事）に就任し、尙書省を管理したのである。楊駿専權體制においては、『晉書』卷四〇 楊駿傳に、

凡そ詔令有らば、帝省訖わり、入りて太后（楊太后）に呈し、然る後に乃ち出す。

とあるように、詔令の發布に際しては、楊太后を経由させたのであり、このことから、楊駿らが特に詔令の作成・傳達に注意を拂っていたことが確認される。楊駿が文書行政の中樞である尙書省に腹心を送り込んだのは、その機能の獨占が目的であったのであろう。よつて楊駿専權體制の中核は、この尙書省であつたと言つてよい。一方の東宮に關しては、前述の通り、この時期の楊駿は皇太子の擁護と、それを行う東宮の存續にも積極的であつたため、惠帝即位後も東宮の管理を繼續したのである。

尙書省の管理、東宮の存續と皇太子の擁護は、いずれも當時の楊駿にとつて同等に重要な政治的課題であつた。尙書省には華廡を送り込み、東宮には何劭を送り込んだが、そのうちの何劭は「通省尙書事」權をも有し、尙書省の運営に參與した。太子太師何劭は楊駿・東宮・尙書省の三者をつなぎとめる役割を與えられたのである。

## おわりに

以上、外戚楊氏擡頭の過程を見てきた。楊駿の擡頭には、武帝によつて重點化された東宮の存在が大きく作用していたこと、本稿の分析で解明できたものと思う。

既に安田氏が論じたように、武帝は即位當初、年長の宗室・大臣に圍まれていたことから、自らの皇帝權力の強化を目指していた。また多數の宗室諸王が存在するなかでは皇位の直系繼承の保持も重要な課題であつたのであり、外戚・宗室による皇太子衷の擁護・東宮の充實化がはかられた。その方針のもとで外戚の楊琰・楊駿が東宮職を領任して東宮に入り、さらに賈充に始まる東宮官屬の尙書省關連職兼任という慣例が結びつき、太康年間（二八〇～二八九）には、車騎將軍・行太子太保・錄尙書事として、汝南王亮・衛瓘とともに尙書を管理するまでに、その地位を向上させたのである。

しかし、このような武帝の組織構築と宗室・外戚の登用による體制強化は、ほとんど武帝個人の意志によつてなされた



ものであり、また東宮三傳のバランスなど、体制の維持にも武帝の力量が必要とされた。この體制構築には、皇帝の政治能力が缺如した場合の対処法などがほとんど考慮されていなかったものであり、それゆえ、太康一〇年（二八九年）の武帝の危篤や、武帝死後の惠帝の即位にあたり、運営と維持に關して皇帝の能力に依存していた體制は瞬間的に變容し、楊駿の專權體制を生み出したのである。

武帝が死去し、暗君惠帝が即位した後の西晉政治においては、外戚・皇后（賈后）・宗室による政務代行が常態化するようになり、惠帝の親政は遂に行われなかった。惠帝期における外戚・宗室の專權は、政治能力を著しく缺く皇帝のもとでの體制維持のためには、むしろ次善の策であったと言えるのかもしれない（現に賈后專權時代の元康年間（二九一―二九九）には目立った政治的混亂はなかった）。しかし實際には惠帝即位以後の八王の亂により西晉王朝は弱體化するのであって、そこには重大な缺陷があったと言わざるを得ない。その解明には、惠帝期の政治史を分析することが必須となるのであるが、それは今後の課題としたい。

## 註

- (1) 石井仁・渡邊義浩「西晉墓誌二題」〔駒澤史學〕六六、二〇〇六年〕參照。
- (2) 安田二郎「西晉武帝好色攷」〔東北大學東洋史論集〕七、一九九八年、同氏著「六朝政治史の研究」京都大學學術出版會、二〇〇三年、四三一―六一頁。
- (3) 安田二郎「西晉初期政治史試論——齊王攸問題と賈充の伐吳反對を中心に——」〔東北大學東洋史論集〕六、一九九五年、前掲「六朝政治史の研究」五―四一頁。
- (4) 下倉涉「散騎省の成立——曹魏・西晉における外戚について——」〔歴史〕八六、一九九六年。
- (5) 安田二郎「西晉初期政治史試論」（前掲）參照。
- (6) 三田辰彦「西晉後期の皇位繼承問題」〔集刊東洋學〕九、二〇〇八年〕參照。
- (7) 安田二郎「西晉初期政治史試論」（前掲）參照。
- (8) 安田二郎「西晉初期政治史試論」（前掲）參照。
- (9) 安田二郎「西晉初期政治史試論」（前掲）參照。
- (10) 『晉書』卷三二 后妃傳上 武元楊皇后條參照。
- (11) 括弧内は中華書局標點本『晉書』校勘記によった。以下同じ。
- (12) 『漢書』卷一九上 百官公卿表上 太子太傅・少傅條、同

- 詹事條、『續漢書』百官志四 太子太傅條、同太子少傅條參照。
- (13) 『晉書』卷三 武帝紀 泰始三年三月丁未「以李熹爲太子太傅。」
- (14) 李熹の「免官」については、小池直子「賈充出鎮——西晉・泰始年間の派閥抗争に關する一試論」(『集刊東洋學』八五、二〇〇一年)を參照。
- (15) 『晉書』卷三九 荀顗傳に「又詔曰、侍中太尉顗、溫恭忠允、至行純備、博古洽聞、著艾不殆。其以公行太子太傅、侍中太尉如故。」とあり、嚴可均『全晉文』卷三はこれを泰始五年(二六九年)のものとする。
- (16) 『晉書』卷三四 羊祜傳、同卷九三 外戚羊琇傳、張金龍『魏晉南北朝禁衛武官制度研究』(中華書局、二〇〇四年)上册一九三―二三二頁參照。
- (17) 安田二郎「西晉武帝好色攷」(前掲)參照。
- (18) 『晉書』卷三 武帝紀、卷三八 文六王傳齊王攸條、卷三九 馮統傳參照。
- (19) 『唐六典』卷二六 太子右春坊條原注「晉惠帝在儲宮、以舍人四人有文學才美者、與中庶子共理文書、至咸寧二年、齊王攸爲太傅、遂加名爲中舍人、位敍同尚書郎。」なおここでは齊王攸の太子太傅領任年代を咸寧二年(二七六年)とするが、實際は泰始年間末であらう。
- (20) 安田二郎「西晉初期政治史試論」(前掲)參照。
- (21) 下倉涉「散騎省の成立——曹魏・西晉における外戚について——」(『歴史』八六、一九九六年)。
- (22) 萬斯同『晉將相大臣年表』は泰始九年(二七三年)に齊王攸が太子太傅を領任したとし、安田二郎「西晉初期政治史試論」(前掲)は泰始一〇年(二七四年)領太子太傅荀顗の死去をもって、後任として領太子少傅齊王攸が太子太傅を領任したとする。
- (23) 祝總斌『兩漢魏晉南北朝宰相制度研究』(中國社會科學出版社、一九九〇年)一六九―一七一頁參照。
- (24) 閻步克『察舉制度變遷史稿』(遼寧大學出版社、一九九一年)は、散騎侍郎・散騎常侍・黃門侍郎といった所謂「黃散」の官は、具體的な職務を有していない官であったとする(一一九頁)。これらと同類の官であった侍中(特に他官を兼任していた侍中)も、おそらくは具體的な職務を有していなかったであらう。
- (25) ちなみに咸寧四年(二七八年)の羊太后(景帝司馬師の后)の死去に伴い、養子である攸は三年喪のため太康元年(二八〇年)まで政治活動を停止しているが、これは賈充が攸の吳討伐への參與を防止するために三年喪を適用させたものである(前掲安田二郎「西晉初期政治史試論」)。
- (26) 『晉書』卷二四 職官志「咸寧三年、衛將軍楊琇與中書監勛以齊王攸有時望、懼惠帝有後難、因追故司空裴秀立五等封建之旨、從容共陳時宜於武帝……」
- (27) 碑文の書き下しは、井波陵一編『魏晉石刻資料選注』(京都大學人文科學研究所、二〇〇五年)によった(二二四頁)。
- (28) 余嘉錫「晉碑雜碑考證」(『余嘉錫論學雜著』(上册)中

華書局、一九六三年、一三三—一七三頁）参照。また萬斯同も楊珣の太子太傅領任時期を太康三年とする（『晉將相大臣年表』）。

(29) ここで使用した『晉辟雍碑』について、福原啓郎「晉辟雍碑に關する一試論」（『研究論叢』（京都外國語大學）五一、一九九八年）は、景帝司馬師の功業に「晉辟雍碑」が一言も觸れていないことについて、當時の武帝と齊王攸（景帝の嗣子）の對立が反映された可能性を指摘する。

(30) 安田二郎「西晉初期政治史試論」（前掲）参照。

(31) 『晉書』卷二四 職官志は、「咸寧三年、衛將軍楊珣與中書監頽勛以齊王攸有時望、懼惠帝有後難、因追故司空裴秀立五等封建之旨、從容共陳時宜於武帝、以爲、古者建侯、所以藩衛王室。今吳寇未殄、方岳任大、而諸王爲帥、都督封國、既各不臣其統內、於事重非宜。又異姓諸將居邊、宜參以親戚、而諸王公皆在京都、非扞城之義、萬世之固。帝初未之察、於是下詔議其制。……既行、所增徙各如本奏遣就國、而諸公皆戀京師、涕泣而去。及吳平後、齊王攸遂之國。」と、楊珣・荀勖が齊王攸の存在を危險視し、宗室諸王の就國・出鎮（州都督任命）を武帝にうながしたとするが、これについて『資治通鑑』は、齊王攸の出鎮決定が咸寧三年ではなく太康三年（二八二年）であること、また『晉書』卷三九 荀勖傳に、職官志の記述とは全く逆の内容の荀勖の上奏が掲載されていることをもってこれを否定した上で（『資治通鑑考異』）、「衛將軍楊珣等建議以爲、古者封建諸侯、所以藩衛王室。今諸王公皆在京師、又異姓諸

將居邊、宜參以親戚……」と記し、荀勖の名と、齊王攸排斥を建議の目的とする職官志の記述を削除した。唐長孺「西晉分封與宗王出鎮」（『魏晉南北朝史論拾遺』中華書局、一九八三年）も『資治通鑑』を支持する。しかし、『晉書』卷四〇 楊駿傳附楊珣傳に、「珣初以退讓稱、晚乃合朋黨、構出齊王攸。中護軍羊琇與北軍中候成粲謀欲因見珣而手刃之。珣知而辭疾不出、諷有司奏琇、轉爲太僕。」とあることから、楊珣が齊王攸排斥の首謀者であった事實は否定できない。齊王攸の出鎮が太康三年まで延期された理由については、賈充の抑制が作用したためであり、咸寧三年に楊珣が齊王攸排斥を武帝に提言したことと矛盾しない。したがって本稿では、『晉書』職官志の記述に基づき、咸寧三年に楊珣が齊王攸排斥を試みたと解釋する（これについては前掲下倉涉「散騎省の成立」も同様の解釋を行っている）。

(32) 皇太子衷と賈南風の婚姻時期について、『晉書』卷三二 后妃傳 惠賈皇后條は泰始八年（二七二）二月とするが、『晉賈皇后乳母美人徐氏銘（徐義墓誌）』は泰始六年（二七〇）とする。

(33) 齊王妃の名は賈瓚。『晉書』卷四〇 賈充傳参照。

(34) 安田二郎「西晉初期政治史試論」（前掲）参照。

(35) 安田二郎「西晉初期政治史試論」（前掲）参照。

(36) 宮崎市定「九品官人法の研究——科舉前史——」（『東洋史研究會』一九五六年）一〇四頁。

(37) 祝總斌「兩漢魏晉南北朝宰相制度研究」（前掲）一八八

一八九頁。

(38) 『晉書』卷三九 王沈傳參照。

(39) 安田二郎「西晉武帝好色攷」(前掲) 參照。

(40) 『晉書』卷三九 荀勗傳に「時太尉賈充・司徒李胤並薨、太子太傅又缺。勗表陳、三公保傅、宜得其人。若使楊珧參輔東宮、必當仰稱聖意。尙書令衛瑾・吏部尙書山濤皆可爲司徒。若以瑾新爲令未出者、濤卽其人。帝並從之。」とあり、荀勗が楊珧を太子太傅に推薦したと傳えるが、楊珧は太子少傅を領任したのであって、太子太傅ではない。よつてこの記述はとらないが、楊珧と荀勗ともに賈充黨であるから、荀勗が楊珧を東宮幹部に推薦した可能性は否定できない。前掲余嘉錫「晉辟雍碑考證」參照。

(41) 『晉書』卷三 武帝紀 咸寧三年正月丙子朔「詔曰、宗室戚屬、國之枝葉、欲令奉率德義、爲天下式。然處富貴而能慎行者寡、召穆公糾合兄弟而賦唐棣之詩、此姬氏所以本枝百世也。今衛將軍扶風王亮爲宗師、所當施行、皆諮之於宗師也。」

(42) 『晉書』卷三六 衛瑾傳參照。

(43) 『晉書』卷三六 衛瑾傳參照。

(44) 『晉書』卷三 武帝紀 太熙元年(二九〇年) 四月の條は、「夏四月辛丑、以侍中・車騎將軍楊駿爲太尉・都督中外諸軍事・錄尙書事。」と、楊駿が錄尙書事に就任した時期を太熙元年四月とするが、後掲の『晉書』卷四〇 楊駿傳の「遺詔」には、既に楊駿が太熙元年以前に錄尙書事を有していたことが明記されている。ここでは楊駿傳に従う。

(45) 萬斯同『晉將相大臣年表』は、太康八年(二八七年)に衛瑾は尙書令を辭し、後任には荀勗が就任した(守尙書令)とする。

(46) 『晉書』卷四〇 楊駿傳「及帝疾篤、未有顧命、佐命功臣、皆已惶惑、計無所從。而駿盡斥群公、親侍左右、因輒改易公卿、樹其心腹。會帝小聞、見所用者非、乃正色謂駿曰、何得便爾。乃詔中書、以汝南王亮與駿夾輔王室。」また福原啓郎『西晉の武帝 司馬炎』(白帝社、一九九五年)一八八頁參照。

(47) 安田二郎「西晉武帝好色攷」(前掲)、辻正博「西晉における諸王の封建と出鎮」(筭谷和比古編『公家と武家Ⅳ—官僚制と封建制の比較文明史的考察』思文閣出版、二〇〇八年、二七五—二九二頁)參照。

(48) 楊駿が汝南王亮を排斥したとする記述は、『晉書』卷四〇 楊駿傳附楊濟傳、卷七五 王湛傳附王嶠傳にも見られ、また卷四四 石鑑傳にも「時大司馬汝南王亮爲太傅楊駿所疑……」とある。

(49) 福原啓郎『西晉の武帝 司馬炎』(前掲) 一八六—一八七頁參照。

(50) 『晉書』卷三 武帝紀 太熙元年三月條、同卷四四 石鑑傳參照。

(51) 太康一〇年封建から武帝の死までの間に、武帝は一時的に危篤状態から回復しており、石鑑の人事はこのときになされたものと思われる。武帝の意識回復については、『晉書』卷三 武帝紀、同卷四〇 楊駿傳を參照。

(52) 職官志には、「乃ち六傳、三太・三少を置き、景帝の諱の師たるを以て、故に太師を以て太保と爲す（乃置六傳、三太・三少、以景帝諱師、故以太師爲太保）」とあるが、この記述を信用するならば、「三太（三少）」とは一人の太子太傅（少傅）と二人の太子太保（少保）のことをさすことになり、不自然である。また太子太保はこれ以前に賈充・楊駿が領任しており、職官志の惠帝即位以後に太師を太保に改稱したとする記述はこの事實に反している。中華書局標點本『晉書』校勘記は『通典』卷一二 太子六傳條、『唐六典』卷二六 太子太師・太傅・太保條の原注に基づき、太師は「太師」に改稱されたと指摘する。本稿もこれに従うが、『晉書』の各所には「太師」「少師」の語が少なからず見られる。これらも本稿では本来「太師」「少師」であつたと解釋しておく。

(53) このときの太子詹事には『晉書』卷六〇 孫旂傳に、「永熙中（二九〇年）、徵拜太子詹事、轉衛尉、坐武庫火、免官。」とあるように、孫旂が就任した。ただし楊駿との關係は不明。

(54) 『通典』卷三七の晉官品の第七品に「太子保傅詹事丞」とあり、丞が「太子保傅」と太子詹事のそれぞれの屬官として設置されたことがわかる。

(55) 『晉書』卷二四 職官志參照。

(56) 『晉書』卷二四 職官志 左右衛率條に、「左右衛率……

泰始五年、分爲左右、各領一軍。惠帝時、愍懷太子在東宮、又加前後二率。」とあり、このうちの後衛率に關しては、『晉書』卷三五 裴頠傳に、「頠以賈后不悅太子、抗表請增崇太子所生謝淑妃位號、仍啓增置後衛率吏、給三千兵、於是東宮宿衛萬人。」とあつて、愍懷太子と賈後の對立が深刻化した元康年間以後衛率が増設されていることが判明する。

(57) 『晉令』とは泰始三年（二六七年）成立、四年（二六八年）頒布の『泰始令』であるが、仁井田陞『唐令拾遺』（東方文化學院東京研究所、一九三三年）は、『泰始令』は惠帝元康年間（二九一―二九九）に一度刊定されたいやう（五―六頁）。

(58) 楊濟の官名について、前掲の『晉書』愍懷太子傳の太子賓友の記述には「太子太傅楊濟」とあり、また『晉書』卷四〇 楊濟傳も太子太傅とするが、このときの太子太傅は王戎であるため（『晉書』卷四三 王戎傳）、ここでは楊濟は太子太保に就任したと解釋しておく。

(59) 『晉書』卷四〇 楊駿傳參照。

(60) 『北堂書鈔』卷六五 太子太師條に「何劭領太師、通省尙書事。」とあり、その原注に引く王隱『晉書』には「何劭字敬祖、以本官領太子太師。」とあつて、何劭の太子太師（太師）を領任としている。王隱『晉書』の「本官」とは、おそらく中書令のことであろうが、中書令には同年に

蔣俊が就任しているから（萬斯同『晉將相大臣年表』）、ここで何劭は中書令を辭任したことになり、その後は太子太帥を本官としたと思われる。ここでは便宜上『晉書』何曾

傳附何劭傳を掲載する。

（61）『晉書』卷四〇 楊駿傳附楊濟傳。

# THE COURT OF THE HEIR APPARENT IN WESTERN JIN AND HIS MATERNAL RELATIVES OF THE YANG CLAN

TANAKA Kazuki

Weakened by the Rebellion of the Eight Princes and the succeeding turmoil of the Yongjia era, the Western Jin was a short-lived dynasty, but it was the establishment and later collapse of the despotic rule of Yang Jun 楊駿, a maternal relative as a the father Emperor Wu's empress, that served as a precursor to the political turmoil that brought the Western Jin dynasty to an end.

The rise of the Yang clan as maternal relations to the throne was greatly affected by the importance placed on the court of the heir apparent in the era of Emperor Wu. The posts in the heir apparent's establishment (the grand mentor 太傅 and the junior mentor 少傅) were occupied by officials of grand councilor 宰相 rank due to the prestige accorded to the heir apparent, and the number of official in his establishment was also increased as the heir apparent grew increasingly important. Then, as a part of a policy of emphasizing maternal relations initiated by Emperor Wu circa the first year of the Xianning era (275), Yang Yao 楊珧, who was a maternal relative as a brother of Yang Jun, was installed as the supervisor of the household of the heir apparent 冢事 and assigned to protect the heir apparent, Zhong 衷 (Emperor Hui). And in the third year of the Taikang era (282) Yang Yao's elder brother Yang Jun entered his establishment as grand protector 太保 to the heir apparent. Due to the joint appointment of officials of the Department of State Affairs 尚書省 to the core of the heir apparent's establishment after the third year of Taikang, the elevation of core officials of the heir apparent's establishment to grand councilor level was brought about. Yang Jun became a leading figure in court politics as a grand councilor along with his colleagues Ju Nan, Prince of Liang, 汝南王亮 who was made grand mentor, and Wei Guan 衛瓘, who was made junior mentor. Then, in the 10<sup>th</sup> year of the Taikang era (289) a turning point was reached as Emperor Wu fell critically ill and Yang Jun removed Ju Nan and Wei Guan and established his own despotic regime.

The ascendancy of Yang Jun, described above, mainly took place by using the heir apparent as a first step, and after the accession of Emperor Hui, the heir apparent functioned as an vital point in the regime of Yang Jun. The importance placed on the heir apparent by Emperor Wu was carried out to protect the heir

apparent and stabilize the dynasty, but ironically it became the breeding ground for the ascendancy of the maternal relatives and became a trigger for later political turmoil.

**THE FRENCH NOTIFICATION TO CHINA OF THE SAIGON TREATY  
AND THE CHINESE MILITARY EXPEDITIONS IN TONKING:  
A CONSIDERATION OF SINO-FRENCH RELATIONS  
REGARDING VIETNAM IN THE LATTER  
HALF OF THE 1870S.**

MOCHIZUKI Naoto

This article reconsiders the France's notification to China of the conclusion of the Saigon Treaty and its relationship with the Chinese military expeditions in Tonkin in northern Vietnam.

It has been known that Qing government's response stating that Vietnam "had long been a tributary state (本係屬國)" of China was mistranslated by the French embassy in China as Vietnam "had been a tributary of China" (*a été tributaire de la Chine*) and was interpreted as the Qing government's relinquishing of suzerainty over Vietnam, and as a result there were no hostilities between France and China for the time being, despite the fact that the independence of Vietnam was proclaimed in the treaty. Nevertheless, the French side regarded Qing military expeditions to Vietnam as demonstrating their suzerainty over Vietnam as problematic. How then was the problem of these military expeditions treated when notification of the Saigon Treaty was issued? This point has seldom been examined in previous scholarship. This article chiefly examines the actions of Comte Julien de Rochechouart, the French charge d'affaires in Beijing at the time and points out his deliberate actions were taken to satisfy the conflicting demands of the French and Qing governments regarding the problem of military expeditions.

The Qing government actually sought an early withdrawal of its troops from Vietnam. However, as the expansion of French power in Vietnam was also not strategically desirable, it could not accede to French demands for a military pull out. When notification of the Treaty of Saigon was issued, de Rochechouart addressed the demand for troop withdrawals not to the army of Guangxi stationed in Vietnam but to the Yunnan army, which had not crossed the border into Viet-